

令和 3 年 7 月 5 日現在

機関番号：23703

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02368

研究課題名(和文) マス・メディア空間における芸術表現と情報流通の研究

研究課題名(英文) Research on artistic expression and information circulation on mass media

研究代表者

松井 茂 (Matsui, Shigeru)

情報科学芸術大学院大学・メディア表現研究科・准教授

研究者番号：80537077

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：第2次世界大戦後、展覧会やコンサートホールといった、専門的な芸術体験を得られる場を紹介するメディアは、マス・メディア(放送局と出版社)によってはじまった。このことは、作品としての実物よりも情報が、ほぼ作品と同義の価値を持って伝播するものとなったことを意味し、1960年代に活動を始めた作家たちは、マス・メディアに自覚的であった。芸術体験を構成する要素として、オリジナリティをもった作品それ自体よりも、複製された情報や、流通する作家像に表現が見出されていく。インターネットを自明とする現在から振り返った際、この系譜を明瞭にした研究成果は、新たな美学、芸術学に資するものとなる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

マス・メディアが登場して以降の芸術は、オリジナリティをもった作品だけではなく、複製された情報や、流通する作家像にも表現を見出している。インターネットを自明とする現在から振り返った際、当然のように考えられる本研究の分析ではあるが、これまで必ずしもこのような観点に基づく芸術史の記述は一般的では無かった。マス・メディアを分母とする芸術観は、多様化する美学、芸術学を再編する一助となる。

研究成果の概要(英文)：After World War II, the mass media (broadcasters and publishers) began to introduce venues for specialized artistic experiences, such as exhibitions and concert halls. The artists who began to work in the 1950, 60s were aware of the mass media. The artists were aware of the mass media, and found expression in reproduced information and circulated images of the artists rather than in original works as elements of the artistic experience. I argued that this genealogy can be clarified when we look back from the present, where the Internet is self-evident. Looking back from the present, where the Internet is self-evident, the results of research that clarifies this genealogy will contribute to new aesthetics and art studies.

研究分野：芸術学

キーワード：マス・メディア テレビ メディア・パフォーマンス 現代美術 現代芸術

1. 研究開始当初の背景

本研究は、2014～16年度に実施した科研費「戦後日本におけるマス・メディア受容と現代芸術の文化学」(26503003)の成果を学術的な背景としている。「文化学」の枠で実施したこの研究では、第2次世界大戦後、1950年代から急速に整備されたマス・メディア(テレビを中心とした放送文化と新聞を中心とした出版文化)の普及が、現代芸術にもたらした影響を、社会学を活かしたメディアロジーの観点から検証した。研究成果として「磯崎新 12×5=60」(ワタリウム美術館、2014年)、「ディスカバー、ディスカバー・ジャパン「遠く」へ行きたい」(東京ステーションギャラリー、2014年)、「高松次郎：アトリエを訪ねて」(yumiko chiba associates、2016年)として発表の機会を得た。TBSとの調査によって発見した1974年放送の『アトリエを訪ねて』「高松次郎」の再放送を含む『ニュースの視点「なぜ、いま、高松次郎か?」』(TBSニュースバード、2015年)を製作しマス・メディアと現代芸術のアーカイブ活用事例を放送する機会を得た。

こうした研究成果の発表を通じて見えてきた課題は、マス・メディアが芸術に関わる情報を取り上げた際の想像以上に多く残された記録を、資料体として編纂し研究に活用することである。残された記録とは、ニュース番組で純粋に芸術に関する情報の紹介として残されている場合、作品や作家に迫るドキュメンタリー、芸術に関わる番組としてではなく、ワイドショーやエンタテインメントに接近した枠組み(例えば深夜放送など)で、実験的かつ奇異な社会行動として、パフォーマンスやハプニングが記録されている場合である。出版文化においても同様で、企業誌、ファッション誌、週刊誌、成人誌などに残された記事が多くある。また、こうしたマス・メディアに残る記録の多くは、通常のアート専門誌よりも数万から数百万の視聴者、読者を相手にしていることから、影響力、伝搬力の大きさからも看過すべきではないのだ。

先述した展覧会は、社会的性格が強い主題を持つ学芸員や美術館との出会いに恵まれたことによって、先の科研費で編成した資料体を活かす機会に繋がった。しかし従来の芸術学、美学・美術史の観点では、こうした取り組みは依然として研究対象と見なされないことが多い。理由としては、対象が近過去である点、番組や雑誌における情報の配列は雑多で、学術分野としては、異なる情報の束であり、ファイン・アートとして作品を見出し難い点、クライアント・ワークであり、制作者が個人でなく集団であることから自立的な作品とは見なし難い点が想定される。

他方で、芸術と社会の関係性の変化、芸術とデザイン等分野の溶解、個人制作からプロジェクトとして組織によってはじめて可能になる受注制作の一般化、消費社会において歴史化される情報の速度が加速している現在において(ジョナサン・クレーリー『24/7』NTT出版、2015年)、現代芸術シーンの研究を、社会学による文化現象の研究対象にのみ止めるべきでは無い。公共圏を重視すると共に、芸術表現の支持体としてメディア空間の充実が進展した現在、歴史の意味それ自体を問い直し、マス・メディアにおける番組という枠組み、雑誌の目次に再配置される現代芸術を芸術学の研究対象と位置づけ、新たな芸術理論の形成には社会的要請があると、これまでの研究活動の成果を背景に、本研究代表者は認識している。作家の回顧展が、本人の生前、それも壮年期に行われ、歴史化されることが一般化した現在、メディア空間の充実と共に、芸術に関わる情報(資料)の消失速度が加速していることに意識を払う必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、第2次世界大戦後の日本の現代芸術の動向を、マス・メディア(放送文化と出版文化)を分母とした文化現象として再配置することを目的としている。マス・メディア空間を芸術表現の支持体として発表された作品は、同一メディア空間上でより広汎に流通すること(情報としての流通)をも表現に組み込んでいると見なせることがままある。観衆、聴衆が作品と情報を弁別することなく芸術表現として受容する領域を、現代芸術が見出した戦略的な「公共圏」とみなし、放送文化における番組という枠組みや、出版文化つまり雑誌における目次や装幀やデザインを、芸術学の研究対象として理論化をはかり、この領域における作家、編集者、キュレーター、ライター的位置づけを分析的研究対象として資料体を編成する。

3. 研究の方法

研究代表者、研究分担者各人の研究をベースに、以下の4つの課題を設定する。

- (1) テレビ番組に見出される芸術表現の研究分析と資料化
- (2) 雑誌誌面を支持体とする芸術表現の研究分析と資料化
- (3) 雑誌の装幀、挿画にみる芸術表現の研究分析と資料化
- (4) 放送、雑誌における芸術に関する情報流通の研究分析

従来の芸術学においては、マス・メディアを重視する観点は挑戦的で、研究手法も必ずしも確立されていない。本計画では、上記の課題を、研究者の実践的な研究の現場で見出された主題と合致させ、まずは具体的な事例の資料化、共有をはかり、ワークショップを通じて、従来の芸術

学に資する研究総括を目指し、現代芸術が見出した戦略的な「公共圏」の定義をはかる。

4. 研究成果

2017年度、1980年代の資料研究に着手したタイミングで、『美術手帖』坂本龍一特集を監修し、出版文化とパフォーマンスが分かちがたく接続している状況に関する研究を進めることができた。特に1983年にYMOを解散した坂本龍一は、1984年に出版社として本本堂、レコード会社として株式会社ミディを設立し、マス・メディアを芸術表現の発表の場にしながら、インディペンデントなレーベルを通じたオルタナティブな活動を展開していることを確認した。

本研究がテーマとする「聴衆が作品と情報を弁別することなく芸術表現として受容する領域を、現代芸術が見出した戦略的な「公共圏」とみなし、放送文化における番組という枠組みや、出版文化つまり雑誌における目次や装幀やデザインを、芸術学の研究対象として理論化をはかり、この領域における作家、編集者、キュレーター、ライターの位置づけを分析的研究対象として資料体を編成する」に際しては、むしろ中心として扱うべき対象であることが確認された。

1984、85年に着目し、芸術表現の分野で、作家自身が、パフォーマンスという言葉を意識し、音楽、出版、ビデオ、自主レーベル、メディア・イベントをもって芸術表現の「脱構築」を意識し、実践したことを特定した。このことに関しては、研究代表者が、2019年度国際日本文化研究センターで代表を務めた「マス・メディアの中の芸術家像」の機会に、坂本龍一氏へのインタビューを実施。時代を特定して行ったオーラルヒストリーとしての性格を有すると共に、基礎研究の成果として公開。マス・メディアでの活動と、それによって実現されたポスト・モダニズムを自覚した当時の芸術表現として、貴重な証言となった。

2018年度、「戦後日本におけるマス・メディア受容と現代芸術の文化学」から継続的に研究してきた建築家、芸術家の磯崎新に関して、「イソ、サム、トーノの福岡相互銀行大分支店 1968年建築と美術の協働」を論文として執筆した。

磯崎が設計した《福岡相互銀行大分支店》は、1967年暮れに竣工したが、1968年前半、建築雑誌（専門誌）のみならず、美術雑誌をはじめ、週刊誌（一般誌）にも多く紹介された。同建築の特殊な形状と色彩計画が専門誌において評価される一方で、一般誌では磯崎新の人物像と社会的な意味で建築家像が注目された。

本論では、磯崎が1950年代から建築家像や仕事観、組織論をどのように考えてきたのかを明らかにすると共に、その実践として従来の建築業者とは異なり、美術家との協働を重視してきたことを検証した。この事例では、『週刊朝日』『美術手帖』『芸術新潮』における磯崎新という建築家像の描かれ方を分析した。言い換えれば、こうした領域横断的な実践を通じて、社会的な建築家像を（過剰に）更新することで、建築という制度的で専門的領域（業界）への批評を行っていることを指摘した。特に雑誌の活用、つまり建築の専門誌から逸脱することで、マス・メディアの中で建築家像を確立する戦略は、これ以降に展開する、いわゆるポスト・モダン現象（1980年代）にもかかわる。

2019年度は、ポスト・モダン現象に接続する磯崎の建築的实践、芸術家としての取り組みを、「繰り返し語り、騙られる《コンピューター・エイディド・シティ》をめぐって一九六八年のテレビジョンと幻視者」を論文として執筆した。本論は、1968年を契機に、磯崎が「ヴィジョナリー」という立場を、方法的に選択することで、アンビルドと呼ばれる領域横断的な議論の機会を、制作手法に取り込んでいくプロセスを、実現を問わない計画を、総合誌や専門誌に発表し、様々な議論を起こすことで、芸術における想像力を建築に取り込んだことを指摘した。

この執筆に関連して（『現代思想』磯崎新特集を監修を担当）、美術批評家、榎木野衣のインタビュー「幻視者としての建築者 3・11以後の列島の 水位」、写真家、篠山紀信のインタビュー「磯崎さんは事件を起こしたかったのかもしれないね、僕に写真撮らせて（笑）」を基礎研究の成果として公開。1980年代から90年代前半にかけての芸術状況と、マス・メディアの関係をとりまとめた。

また前述した1984、85年に関する坂本龍一のインタビューにも関連するが、1985年の磯崎新と浅田彰の最初の対談「アイロニーの終焉」を踏まえて、両者の対談を実施しポスト・モダニズムの再論を目論んだ。

2020年度は、本研究の背景となった「戦後日本におけるマス・メディア受容と現代芸術の文化学」とあわせた成果のとりまとめとして論集『虚像培養芸術論 アートとテレビジョンの想像力』（フィルムアート社、2021年3月）を刊行した。本書の構成は以下のとおりだ。

第1部 虚像培養国誌

第1章 知覚のボディ・ビルディング その日常性への上昇

第2章 東野芳明と横尾忠則 ポップ・アートから遠く離れて

第3章 戦後日本におけるマス・メディア受容と現代芸術の文化学 高松次郎の場合

第2部 アーティスト・アーキテクトの時代

第4章 出来事の編纂 都市デザインとしての《SOMETHING HAPPENS》*

第5章 イソ、サム、トーノの《建築空間》 福岡相互銀行大分支店にみる建築と美術の協働*

第6章 「かいわい」に「まれびと」が出現するまで 「お祭り広場」1970年

第7章 繰り返し語り、騙られる《コンピューター・エイディド・シティ》をめぐって
1968年のテレビジョンと幻視者*

第3部 アートとテレビジョンの想像力

第8章 マス・メディア空間における芸術表現と情報流通 雑誌『現代詩』を事例に*

第9章 テレビ環境論 その2 《あなたは...》と《ヴォイセス・カミング》と

第10章 流通するイメージとメディアの中の風景

「*」は、本科研費に基づく直接的な研究成果であり、その他既出の論文から構成されるが、本研究の成果を反映させ、大幅に加筆されている。

本書に初出となった、2つの論文について説明する。

第4章「出来事の編纂 都市デザインとしての《SOMETHING HAPPENS》」は、磯崎を中心に、先行する世代の芸術家、同世代のネオ・ダダ、1960年代のマス・メディアを手がかりに、当事者たちが残した言説の分析を通して、どのように芸術家像が更新されていたのかを分析した。この論文では、マス・メディアを介して公開されてきた、岡本太郎、丹下健三の都市計画に続き、磯崎が実行したハブニングも、新たな都市計画であったことを指摘した。この展開が、大阪万博における《お祭り広場》(1970年)、つくばセンタービルをめぐるメディア上での論争(1984~85年)へと展開することを示唆した。

第8章「マス・メディア空間における芸術表現と情報流通 雑誌『現代詩』を事例に」は、第2次世界大戦後、1950年代のメディア論の受容、総合芸術運動の相互浸透を確認した。清水幾太郎、思想の科学(鶴見俊輔、南博、加藤秀俊など)を中心とした、アメリカの社会心理学を日本に紹介した。そして社会心理学の研究者自身が、受容と実践と自己批判をしていた状況を明らかにすると共に、文学者を中心とした動向に反応した芸術家達の言説を、『現代詩』という雑誌の上で確認した。この雑誌自体は、マイナーな専門誌ではあるが、思想の科学をはじめとした社会心理学の動向と、戦前(戦中)からの総合芸術運動、放送局の人脈を接続する役割を果たした、詩人、編集者の関根弘の活動の場で出会ったことによるものだった。

本論では、こうした戦前から連続する世代による戦後の動向が、1960年代前半(特に60年安保闘争)によって第一線を離脱し、その次の世代(1930~40年生まれ)が、メディアにイデオロギーを乗せるのではなく、メディアを使うこと自体をイデオロギーとすることによって、新たな芸術家像と作品概念を提起していったことを結論付けている。

第2次世界大戦後、展覧会やコンサートホールといった、専門的な芸術体験を得られる場を紹介するメディアは、マス・メディア(放送局と出版社)によってはじまった。このことは、作品としての実物よりも情報が、ほぼ作品と同義の価値を持って伝播するものとなったことを意味し、1960年代に活動を始めた作家たちは、マス・メディアに自覚的であった。芸術体験を構成する要素として、オリジナリティをもった作品それ自体よりも、複製された情報や、流通する作家像に表現が見出されていく。インターネットを自明とする現在から振り返った際、この系譜を明瞭にした研究成果は、新たな美学、芸術学に資するものとなる。

このことは『虚像培養芸術論』に寄せられた以下の書評からも明かだろう。

「いま「虚像」といえば大学の授業から株主総会まで何でも呑(の)みこむ「オンライン会議」に尽きるだろう。あの画面には文字通り「遠近」がなく、つまりは奥行きのない縁しか生まない。しかし10年前の震災でテレビ速報とネット情報の「虚像と動画が入り交じる体験」が本書の契機となったという著者は、現下の状況にも何か違う可能性を見ているかもしれない」(生井英考「複製技術の時代を横断的に観察」『朝日新聞』2021年05月29日)。

「日本で「メディア論」といえば、カナダのトロント学派、ドイツのフランクフルト学派、イギリスのバーミンガム学派といった知的潮流が渾然一体に混ざりあった学問として理解され、アメリカの機能主義的な「マス・コミュニケーション研究」と対置されることが多い。しかし本書では、一九五〇年代に清水幾太郎、南博、日高六郎らが社会心理学の観点から「マス・コミュニケーション」について論じたことが、当時の芸術表現や情報流通のあり方に大きな刺激を与え、さらに六〇年代にはマーシャル・マクルーハンの影響も相まって、芸術家たちのメディア論的想像力の覚醒につながっていった過程が、説得的に跡づけられている。「マス・コミュニケーション研究」と「メディア論」のあいだに横たわる教科書的な二項対立を解除し、相互のミッシングリンクを描く上でも、本書の議論は示唆に富んでいる」(飯田豊「美術史の切断面を浮き彫りに 芸術家たちのメディア論的想像力覚醒の過程」『週刊読書人』2021年6月4日)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 松井茂	4. 巻 48-3
2. 論文標題 繰り返し語り、騙られる《コンピューター・エイティド・シティ》をめぐって 一九六八年のテレビジョンと幻視者 現代思想	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 242-255
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井茂	4. 巻 48-3
2. 論文標題 インタビュー榎木野衣「幻視者としての建築者 3・11以後の列島の 水位 」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 128-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井茂	4. 巻 48-3
2. 論文標題 インタビュー篠山紀信「磯崎さんは事件を起こしたかったのかもしれないね、僕に写真撮らせて（笑）」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 290-303
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井茂、川崎弘二	4. 巻 11
2. 論文標題 「坂本龍一インタビュー」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 紀要	6. 最初と最後の頁 176-189
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井茂	4. 巻
2. 論文標題 イソ、サム、トーノの福岡相互銀行大分支店 1968 年建築と美術の協働	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 1968年 激動の時代の芸術 (千葉市美術館)	6. 最初と最後の頁 254-257
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中西博之	4. 巻
2. 論文標題 所蔵作品展について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 視覚芸術百態	6. 最初と最後の頁 82-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石原友明、福永一夫、原久子	4. 巻 なし
2. 論文標題 80年代から現在における記録写真とメディアの変遷について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 京都市立芸術大学「状況のアーキテクチャー事業報告書2017-2018」	6. 最初と最後の頁 38-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊村靖子	4. 巻 なし
2. 論文標題 「デザイン」をめぐる認識論的転回	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ピアトリス・コロミーナ、マーク・ウィグリー著『我々は人間なのか？デザインと人間をめぐる考古学的覚書き』	6. 最初と最後の頁 315-319
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井茂	4. 巻 1053
2. 論文標題 坂本龍一 ロング・インタビュー あるがままのSとNにMを求めて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 美術手帖	6. 最初と最後の頁 18-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井茂	4. 巻 1053
2. 論文標題 坂本龍一にみる"メディア・パフォーマンス"の表現史	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 美術手帖	6. 最初と最後の頁 38-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井茂	4. 巻 1053
2. 論文標題 マスメディアとアーティスト	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 美術手帖	6. 最初と最後の頁 74-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井茂	4. 巻 1053
2. 論文標題 坂本龍一をつくった音楽、映画、アート	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 美術手帖	6. 最初と最後の頁 76-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井茂	4. 巻 1054
2. 論文標題 坂本龍一「設置音楽展」インタビュー	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 美術手帖	6. 最初と最後の頁 126-129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井茂	4. 巻 1065
2. 論文標題 共感への公然たる抵抗を考える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 美術手帖	6. 最初と最後の頁 94-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 伊村靖子
2. 発表標題 "Art/Anti-Art" in Media Environment: the Concept of "Anti-Art" in Criticism by Yoshiaki Tono
3. 学会等名 カリフォルニア大学バークレー校 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 原久子
2. 発表標題 関西のアートシーンの記録事情
3. 学会等名 札幌市資料館SIAFラボ (招待講演)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 水沼啓和ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 千葉市美術館、北九州市立美術館、静岡県立美術館	5. 総ページ数 300
3. 書名 1968年 激動の時代の芸術（千葉市美術館）	

1. 著者名 中西博之	4. 発行年 2017年
2. 出版社 国立国際美術館	5. 総ページ数 140
3. 書名 ライオン・ガンダー - この翼は飛ぶためのものではない、ライオン・ガンダーによる所蔵作品展 - かつてない素晴らしい物語	

1. 著者名 松井 茂	4. 発行年 2021年
2. 出版社 フィルムアート社	5. 総ページ数 312
3. 書名 虚像培養芸術論 アートとテレビジョンの想像力	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中西 博之 (Nakanishi Hiroyuki) (20231722)	独立行政法人国立美術館国立国際美術館・その他部局等・研究員(移行) (84411)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	伊村 靖子 (Imura Yasuko) (60647931)	情報科学芸術大学院大学・メディア表現研究科・准教授 (23703)	
研究分担者	原 久子 (Hara Hisako) (80411479)	大阪電気通信大学・総合情報学部・教授 (34412)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関